

大きな成長の機会はず必ずある

東京都立晴海総合高等学校 キャリアカウンセラー

千葉吉裕

2011年3月11日に起こった東日本大震災の、想像を絶する自然災害に、大変深い悲しみを抱いております。亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆様、そのご家族の方々に対しまして、心よりお見舞い申し上げます。被災地の一日も早い復興を心より祈念しております。

さて、今回の自然災害で、さまざまなこと考えさせられました。

大きな災害に直面しながらも、略奪や暴動を起こさず、規律を保つ日本人の道徳性、倫理性の高さに、世界から称賛の声があがりました。日本では、教科教育以外に、特別活動を設けており、その中では、学校行事、生徒会活動、学級活動やホームルーム活動など集団での活動を行っています。互いに協力し合い、諸問題を解決する態度を学校教育の中できちんと養ってきた成果が、このような非常事態の中でも生かされたものと思われまます。

その一方で、情報を鵜呑みにしてしまつた態度もあらわになりました。原子力発電所の事故の安全性の判断について、情報の透明性が乏しかったことでもあります。いたずらに怖れたり、安心したり、また、メディアの情報をそのまま信じる人もいました。放射性ヨウ素から身を守ると言つて、「つがい薬を飲む」など誤つた振る舞いをする

人までいたようです。これは、いわれた知識を覚え、その記憶をテストなどで確認するという方法に慣れ親しんできたことや、情報量の増大と情報処理のスピードが求められていることが原因かもしれません。情報そのものを疑つてかかる態度、物事を深く考える思考が乏しくなっていると感じました。

東北地方太平洋沖地震、津波、原子力発電所の事故は、東日本を中心に大きな被害を与えました。たくさんの方々が、街の破壊、交通網の遮断、電力不足による計画停電、放射性物質の飛散など、日本全体の経済に与えた損害は、とてつもなく大きいことがわかります。そこに、海外情勢の影響を受けた石油の値上がりや追い打ちをかけています。操業を停止せざるを得ない製造ライン、輸送・流通コストの上昇、原料やエネルギーの高騰など、日本の牽引産業である製造業に、厳しい試練を与えています。復興にどれだけの時間がかかるのかも定まらない状態です。

日本は、どうなつてしまつたのでしょうか。学校現場の立場で言えば、平成23年度以降の企業の採用がたいへん心配です。進学費用を工面できない生徒も増えるでしょう。テレビ広告では、「がんばろう日本」をスローガンに元気をふるい立たせようとしています。ネガティブな気持ちにならないことも

大切ですが、気持ちだけでは、危機を乗り越えることはできません。この逆境を打ち破る英知を結集することが求められています。ビジョンを明確にし、戦略的に、アクションを起こすことが大切です。

ドフッカーは述べています。「大きな成長の機会はず必ずある」という項目によつても扉を叩く。1930年代にも、会社、病院、大学を問わず、事業内容をよくし続けていた組織には成長の機会が訪れた。」(『実践する経営者』上田惇生訳 ダイヤモンド社)

今こそ教師は、教育の目的、学校の役割を再確認し、生徒や社会にとつて、ほんとうに価値のある教育とは何か、過去に縛られていないか、根本的に問い直すべきではないかと思ひます。危機において、本質に特化していくことが、すべての組織に求められているわけですから。

「高い道徳性を備え、自分の頭で考え、危機を乗り越えられるだけの勁い心を身につけた人間を育てること」。それが、我々教師に、今の日本の状況を打ち破るために与えられた使命ではないでしょうか。少なくとも、物知りだけの人間を作ることではないことは確かでしょう。